

# 深谷市

## 川本中学校 川本北小学校 川本南小学校

### 目指す児童生徒像

ふるさとを愛し、志高く生きる 川本のこどもたち

### 重点目標

- ① 県の学習状況調査の算数・数学科と理科の結果が、3校共に、県平均を上回ること。
- ② 不登校児童生徒の割合が、3校共に、県平均を下回ること。
- ③ 「埼玉県や今住んでいる市町村の歴史や自然について関心がある。」の項目で、そう思うと回答する児童・生徒の割合で県平均を上回る。
- ④ 「将来の夢や目標をもっている。」の項目で、そう思う生徒を95%以上にする。

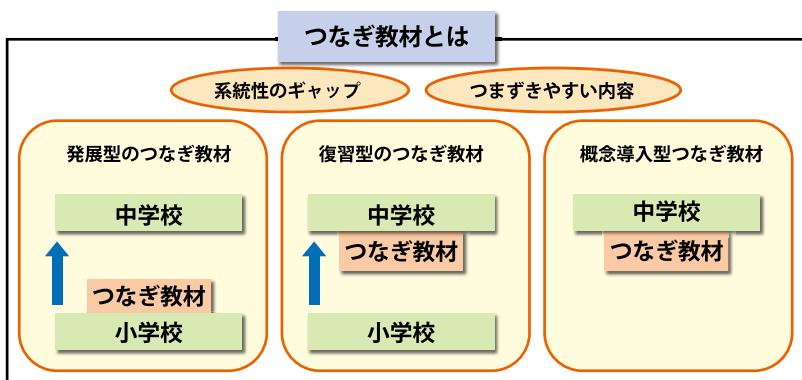
### 平成25年度 事業計画

		重点目標との関連	主な取組	主な工夫・手立て
必須メニュー	「埼玉県小・中学校学習状況調査」結果や「教育に関する3つの達成目標」の検証結果の分析・活用	①	・学力向上におけるPDCAサイクルのうちCheckの場面で、諸調査のデータを活用し、取組の効果の検証や授業改善に役立てる。	・小学校高学年に中学校の数学教員が乗り入れ授業(TT)を実施し、小中のつながりを意識した指導を行う。
	9年間を見通したカリキュラムの編成	①	【編成する教科等】 国語、社会、算数・数学、理科、外国語活動・英語、音楽、図工・美術、体育・保健体育、家庭・技術家庭、道徳、生活・総合的な学習の時間、特別活動、特別支援、情報教育	・9年間を見通した年間指導計画を5つのステップ(現状と課題の分析、全体計画の作成、つなぎ教材の作成、検証授業の実施、年間指導計画の作成)を意識しながら作成する。
	児童生徒の交流(合同行事、合同授業等)	②	・中学生による小学校補習教室での学習支援 ・小学生による部活動見学・体験 ・中学生による小学校音楽会参加 ・交流授業(小・中学生合同の外国語活動) ・小学生による授業見学 ・小・中学生による地域のボランティア清掃	・昨年度の経験を生かし、企画・運営面で教師主導から生徒主体へシフトしていく。 ・研究終了後も永続的な取組となるよう無理のない運営方法で実施する。 ・昨年度の反省を生かして、小学校高学年だけの交流にならないよう留意する。
	教職員の交流(合同研修、乗り入れ授業等)	①②	・小・中学校合同研修会(年5回) ・全教科等での授業研究会 ・小・中学校教員相互の授業参観	・授業づくりの質的な向上を図るため、指導案作成の段階から、市研究協力員や市教委指導主事が協議に参加する。
	小学校高学年の一部教科担任制	①	(川本北小 週18時間) ・5・6年理科 (川本南小 週6時間) ・5・6年理科	【期待できる効果】 ・専科教員の専門的な指導により、荒川や地域で見られる化石、白鳥など郷土の自然を活かした授業が実施可能となることから、児童の理科への興味関心や学力が高まることが期待できる。
選択メニュー	小・中学校教員のチームティーチング	①	・6年算数 週3時間 川本中→川本北小 ・6年算数 週1時間 川本中→川本南小	・学習内容について中学校とのつながりを意識した指導を行い、中学校への不安を解消し、学習意欲を高める工夫を行う。
	独自教材の開発	③	・川本中学校区における自然や伝統文化、偉人などに関する内容を盛り込んだ教材やカリキュラムの開発 ・「渋沢栄一こころざし読本」を活用した道徳の授業	

## 『9年間を見通したカリキュラムの編成 ～「つなぎ教材」を取り入れた授業づくり～』

### 1 視点・キーワード

- (1) 川本中学校区における9年間を見通したカリキュラムの編成では、全教科等における「つなぎ教材」を組み入れたカリキュラムと授業づくりに取り組んでいる。
- (2) 「つなぎ教材」とは、系統性のギャップやつまずきやすい内容を補い、なめらかな接続をめざすためのスロープ的な教材、授業である。(下図参照)



小・中教員によるチーム  
ティーチング（算数）



カリキュラム編成部

### 2 概要（組織との関連、手順等）

川本中学校区では、以前から教職員交流や児童生徒間交流などの小中連携を進めている。このアドバンテージを生かして、9年間の学びの連続性を意識したカリキュラムづくりと授業づくりを研究・実践している。

- (1) 本研究・実践については、市研究協力員（市立幼稚園・小学校・中学校的教員の68名）と連携して進めることで、成果を市全体で共有している。
- (2) カリキュラム作成では、系統性のギャップを洗い出し、ギャップを埋めるための「つなぎ教材」を開発、実効性のある全体計画と年間指導計画作成に努めている。
- (3) 川本中学校区教員は、授業づくり主担当として、一人一つのつなぎ教材を組み入れた指導案を作成し、チームで指導案を検討後、検証授業を行った。



中学校入学前の部活動体験

### 3 評価

- (1) カリキュラム作成や授業づくりを通して、小・中学校的教員の交流がさらに深まり、小中一貫教育の有効性が実感できた。
- (2) カリキュラムの研究を市全体で共有したことから、市内教員の資質向上を図ることができた。



中学生による小学生への学習支援

### 4 主な課題と留意点

カリキュラムの共通理解を図る合同研修等の充実を図るためにには、市内各校で小中一貫教育コーディネーターを位置付けていく必要がある。